

生徒指導研究

川田 基生 倉田 有邦 酒井 為久 田内 公望
羽田野敦子 原 幸宏 丸山 豊 安井 弘美
山本 岩男 米田 閔一 米山 誠

生徒指導に関する共同研究の歩み

— 1969 ~ 1984 —

米 山 誠

1. 研究経過の概要

生徒指導に関する本校での共同研究の歩みを跡付けてみたい。本校「紀要」の第3集（1957年度）から第29集（1984年度）まで毎回、各年度の研究内容が報告されているので、それらを通して概要を述べることにしよう。

1950年代から1960年代にかけては、集団指導と個人指導の問題、ホームルーム・生徒会・部の問題、道徳教育・躰・生徒管理の問題等が主な研究テーマとしてとりあげられている。

次に1970年代は、いわゆる高校紛争として騒がれた諸問題との対応から始まった。そして「生徒の自主性を生かす生徒会、学校行事、ホームルーム等の指導」が主要なテーマとなった。文化祭、研究旅行、臨海・林間学校等の抜本的検討や、1970年前後の紛争以来高校生徒会の主な懸案事項となった制服制帽規定、掲示規定等の検討を繰返し行ったのはこの時期である。

1980年代には、全国的に一般化してきた非行問題の激増、低年齢化等の状況の中で、中学生の指導を重視せざるを得なくなり、まず、中学の生活指導と学級経営が研究テーマとなった。ひきつづき、本校（中学・高校とも）の自由・自主性尊重の校風が、実際には、厳しさに欠けて放任となり、生徒の生活態度の無気力や乱れの原因となっているのではないかという反省から、生徒指導における自由・自主性・規律等の問題をテーマとして、生徒の実態に即して検討を進めた。本校の教育方針や指導目標が、はたして教育実践の中で生かされているのかどうかについて考察し、自主的で規律ある集団生活の厳しい指導をめざして教師全員の

意志統一をはかるための教官会議、研究会議の討議資料とした。

今後、自主性を生かす指導にとって最大の課題は、いかにして生徒各自の社会的、道徳的な自覚と判断力を高めるかということである。中学・高校生の個人個人に自由と自主性の尊さと厳しさを実感させ、体得させるような教育実践のあり方を根気よく研究しなくてはならないと考えている。

2. 各年度の研究内容 (1969年度～1985年度)

ここには、生徒指導研究グループの1969年度から1985年度までの約15年間にわたる各年度の研究テーマを年度順に列記しておく。

・1969年度

「生徒の実態に即した高校生徒会活動の指導」（全国附連高校部会で発表。「紀要」第15集に、「生徒会指導の方向を求めて——生徒会に対する共闘派生徒・一般生徒・教師の意識の落差——」の題で発表）。

・1970年度

「生徒会活動の指導と問題点——生徒の無気力・無関心の実態とその対策——」（本校の中等教育研究協議会では、中学・高校の各生徒会、部、ホームルーム活動の実態と生徒の意識の問題点について発表。「紀要」第16集に発表）。

・1971年度

「制服・制帽規定の現状と問題点——高校生をとりまく教育全体の中での制服・制帽問題の取り扱いについて——」（「紀要」第17集に発表）。

・1972年度

「本校学校行事の批判的検討」(「紀要」第18集には、「学校行事とは何か」,「本校学校行事の歴史的変遷と特質」,「研究旅行,対金大附高競技会,臨海学校,林間学校,文化祭等の批判的検討」として発表。本研究は文部省科学研究費の交付を受けた)。

・1973年度

「生徒の主体性を生かした生徒指導のあり方を求めて——制服・制帽問題,ソフトボール大会,研究旅行,臨海学校,文化祭,進路指導等について——」(中等教育研究協議会で発表。「紀要」第19集に発表)。

・1975年度

「生徒の自主性を生かした生徒会指導の試み——高校制服・制帽問題,掲示自由化問題,中学早朝ラジオ体操存廃問題,文化祭のあり方,部・クラブ・生徒会のあり方,保健室での生徒指導等について——」(「紀要」第20集に発表)。

・1976年度

「多層化する中学・高校生の生徒指導上の諸問題——部・クラブ・文化祭・林間学校等の問題,制服問題,家庭教育と学校教育の問題——」(「紀要」第21集に発表)。

・1977年度

「多層化する中学・高校生の生徒指導上の諸問題——51年度中学・高校生徒会指導の成果と問題点,文化祭・部活動・林間学校等の問題,高校生の進路指導等——」(「紀要」第22集に発表)。

・1978年度

「自主性を生かした生徒指導のあり方を求めて——教科外活動に対する生徒の意識,部活動の指導,文化祭の指導,保健室における生徒の実態等——」(中等教育研究協議会で発表。「紀要」第23集に発表)。

・1979年度

「中学生の生活と意識——中学生指導の当面する諸問題,本校生徒の生活と意識の実態,生徒の声にどう対応するか——」(「紀要」第24集に発表)。

・1980年度

「中学・高校生の図書館利用の実態と問題点——学校図書館のあり方,生徒の図書館利用状況,今後の問題——」(「紀要」第25集に発表)。

・1981年度

「生徒指導における自由・自主性・規律等の問題——教育方針の理想と現実,学校生活に対する生徒の意識の実態——」,「本校の教育に対する保護者の評価」,「中学の学級経営」,「学級集団づくり」(「紀要」第26集に発表)。

・1982年度

「生徒指導における自由,自主性,規律等の問題——生徒理解の緊要性,学校生活に対する生徒の意識

の実態,“厳しさ”の問題——」,「学級経営の実践的研究」(中等教育研究協議会で発表。「紀要」第27集には「生徒指導における自由・自主性・規律等の問題(Ⅱ)」を発表)。

・1983年度

「学級集団づくりの問題点——条件整備の問題——」(「紀要」第28集に発表)。

・1984年度

「自主性と規律の指導における基本的な課題——特別生徒指導の実態,学校生活に対する中学・高校生の意識の実態,生徒像の問題点と基本的な課題——」,「学級経営の実践報告」(「紀要」第29集に発表)。

・1985年度

「生徒の自覚・判断力を高める自主性と規律の指導——学級・生徒会・学校行事等の集団活動の指導及び生徒の個別指導を通して——」。

3. 今後の課題

約15年間の研究の歩みを顧みて感じたことの第一は,同じような問題について何度でもくり返しくり返し取り組んできたということである。このことは,生徒指導の問題が年ごとにきれいに解決して終わるといふ具合にはいかないことを意味している。特に自主性の指導という教育方針をいかに実現するかということになると,教育の永遠の目標ともいえそうであり,不断の努力を要することはいうまでもない。今後も一層根気よく同様のテーマにかかわりながら,着実な実践的研究を進めなくてはならないと思う。

第二は,「共同研究」という研究体制の効果と困難ということである。各自の実践例や理論を集団の中で交流することによって,よりよい実践や理論に発展させていくところに共同研究の効果があるはずである。しかし実際には,各自の教科や校務分掌の仕事に忙殺されて,教科,分掌の枠を超えた自主的メンバーとはいえ,集合して討議する機会がもちにくい。人数が多ければなおさらである。実際問題として,中等教育研究協議会等のための打ち合わせの場に過ぎなくなってしまうおそれがある。

生徒指導においては,急を要する重要な問題が次々に起きてくる。指導の判断と処置を誤ると,生徒に不幸な結果を及ぼしたり,学校の秩序を混乱させたりする。教師集団の意志統一と結束した協力がなくては決して問題の正しい解決は望めない。共同研究の体制を有効に生かし,実質的な研究活動を継続することによって,私達の生徒指導の能力を理論的にも実践的にも向上させてゆきたいものである。